

the COMMUNICATOR 10 月号

心と心、世界と日本を結ぶ*コミュニケーター

私と国際交流・インタビュー

開かれた日本であってほしい

一般社団法人国際フレンドシップ協会 会長 ^{ひらかた すみこ} 平形 澄子

IFA、国際フレンドシップ協会が設立されたのは1969年、当初の活動の一つとして、海外の学校を卒業した日本人の日本企業への就職に関する情報提供がありました。その後、80年代には帰国子女の数が増え、そうした活動が交流事業へと変わっていきます。その流れをつぶさに経験した私が、今、IFAの会長に選ばれ、国際交流・協力促進の事業を推進するにあたり自らの経験が少しでも役立てられればと思っています。

●キューバ革命に遭遇する

学齢期にキューバ、英国、タイでの海外生活を送りました。今の仕事もそうですが、新しいこと、異なる文化の発見がある生活は楽しいものです。

1957年6月、商社勤めだった父の転勤で母、姉とともに氷川丸で米国・シアトルに渡り、そこからキューバへ向いました。着いたその日から、近所のアメリカ人と遊び始めていました。子どもの順応性というのはすごいものです。父が準備してくれた学校にすぐに通い始めました。数ヶ月して、忙しくしていた父から学校はどうかと聞かれ、「毎日歌って、踊って楽しい」と答えました。おかしいと思った父が確認すると、小学校に入学させたはずの私は幼稚園に入園させられていたのです。背丈の低い私は何の違和感もたず、もたれなかったのでしょうか。すぐに小学校に移らせてもらいました。

59年元旦、例年のように日本国大使館に現地在留邦人が集まりお正月のお祝いをしていると、外で銃声が鳴り響きはじめました。当時、何が起きたのがよくわかりませんでした。それがキューバ革命だったことをあとで知りました。それまでのキューバは米国式の生活でしたが、革命後は当時通っていたスペイン語と英語の両方で教えてくれた学校はなくなり、スーパーマーケットも閉まりました。デパートは焼かれ、家から見る景色も変わりました。裕福な友だちの家族はあつと言つ間に亡命しました。朝の道路には夜中に通ったと思われる戦車のキャタピラーの跡

も見られました。いつの間にか在留日本人も脱出し、母、姉、私の3人は、その夏、船で米国・タンパに渡り日本に戻りました。

父は62年10月のキューバ危機の直前までカストロ政権下で仕事を続け、砂糖工場を建設しました。この工場は今も残っているそうです。



1951年、東京生まれ。66年、私立啓明学園中学校を卒業後、英国ダグラス・ハウス・スクールに学び、69年卒業。その後、タイでの生活を経て、英国カムデン・アート・センターで学び、75年、TBSテレビ勤務。83年、株式会社ウィルビー・インターナショナルを設立し、代表取締役となる。2014年9月、IFA会長に就任。

●英国での高校生活

帰国後は東京に戻り、私立啓明学園の小学4年生に編入しました。内部進学した中学では、毎日担任の先生に反抗するのが楽しみでした。担任は姉と同じ先生でしたが、明るく素直な姉と議論好きな私の違いにさぞかし戸惑ったことでしょう。

66年春、私が中学、姉が高校を卒業すると、家族3人で父が赴任していた英国・ロンドンに渡りました。私たちが着くと、いきなり、父から「澄子は高校の寮に入るぞ」と言われ、とまどいましたが、決まったことだから仕方ないとあきらめ、9月から、ロンドンから遠くの寮での高校生活が始まりました。学校ではなかなか英語についていけず、静かに美術や数学に励みました。ところが入学して3ヵ月目、

耳にしていた英語が突如、わかるようになったのです。すると以前の性格に戻りました。おかしいと思う寮の規則を校長先生に申し出て、ことごとく変えていきました。例えば、上級生は3人以上なら週末に映画や散歩に行けるようにしたり、週1回の洗髪も週数回は洗えるようにしました。当時の校長先生は、私が初めての外国人だったこともあり、じっくり私の主張を聞いてくれたようです。その寛容さには感謝しています。

●言葉の大切さ

高校卒業後は、父が赴任していたタイで2年弱生活しました。タイ語、フランス語と油絵を学びましたが、学校には行かずに、友だちとバタヤの海にばかり遊びに行っていました。これは「いかん」と思った父から、日本か英国に戻って勉強しろと言われ、英国に戻り、絵の専門学校に入学しました。卒業後は、パリのボザール（フランス屈指の伝統ある美術学校）で絵の勉強を続けようと思いましたが、帰国後母が体を壊し、パリ行きはあきらめました。母の体調の回復後、東京放送（TBS）で東京音楽祭というイベントの仕事を始めました。英語が話せることで重宝がられ、色々な部署で仕事を頼まれました。8年間の勤務の後、自分の知識や経験と人脈を生かせる仕事をしたいと思い、独立し通訳・翻訳会社を立ち上げたのです。

仕事をしていて感じるの、日本の社会は異なるものを排除する傾向にあるということです。世界は異なる文化や考え方に溢れています。それらに関わりなしで生きていくことはできません。人は一人では生きていけないのと同様、国も一国だけで生きてはいけません。一人ひとりが自国を知つうえで、他国を知り、他国の文化や言葉も学び、他国と共に生きていくことを実感してほしいです。日本語と多くの外国語、お互いの文化を大切にしながら、その壁を乗り越える架け橋となつていけるよう、これからも日々努力をしていきたいと思っています。



ジュニア大使の思い出と現在

井上 剛
歯科医師

第3回武蔵野市ジュニア大使
当時中学1年生

れました。そのときに得た感性が現在携わっている仕事にも活かされており、まだまだ英語が堪能というレベルではないものの、意思疎通を図るうえで話せることのみでなく、相手の状況を考える（想像する）ことができるというこの礎となっています。



ちょうど、アメリカで初めての黒人大統領が誕生した2009年、私は演説のあったワシントンD.C.の真北に位置する、メリーランド州に1年間留学していました。激動ともいえるその当時のアメリカの興奮した状態は、研究所においても感じる事ができました。

演説を聞くために100万人以上の人が集まり、歓声をあげていた様子は今でも鮮明に思い出されます。旅行や出張で海外に少し行くことがあっても、なかなかその土地での生活や人間関係などは感じることはありません。実際に住む、滞在することで得られる情報は常に生々しく、自分がこれまで日本の生活で得てきた常識の範疇を平気で凌駕していきます。オバマ大統領が誕

生したそのときの感覚も、日本にいてテレビを通して感じることは遥かに差があったのではないかと思います。

私の本業は歯科医師であり、多くの患者を大学病院という特殊な環境で診ています。通常「歯医者に行く」とは、近所の歯医者者に診てもらおう方がほとんどだと思います。しかしながら、中にはこころや体に病気を抱えていることが原因で、いわゆる開業医で治療が受けられない人がいます。そんな人が受診するのが大学病院です。様々な事情を抱えている方がほとんどですから、そういう患者さんの言葉や背景をいかに捉え考えるかが治療を進める上で重要な鍵となっています。

武蔵野市ジュニア大使に参加して、人との関わり方を学び、その後の様々な経験につながっていることに感謝したいと思います。

「武蔵野市ジュニア大使」

ジュニア大使事業は、多感な子どもたちが、外国語や異なる文化への関心を軸に「真の国際交流とは何か」を理解し、「正しい国際感覚」を身につけ、「世界的視野」に立てる人材に育てて欲しいとの願いから国内外の公的機関の後援を得て1985年に始まった。

「武蔵野市ジュニア大使」はその翌年、86年から99年まで、東京都武蔵野市からの依頼により組織し、米国テキサス州ラボック市に派遣。

世界万華鏡

金子 進次 “クロアチア共和国・ドブロブニクを訪れて”

2014年の春、「ピースポート国際交流の船旅」に通訊ボランティアとして参加した。「地球一周〇〇〇万円」とうたわれたポスターを見かけたことがある方も多いだろう。この中で私は、日本・海外からの講演者による船内での講座の通訊、寄港地での現地ガイドの通訊、の2つを主に担当した。

活気溢れるアジアに始まり、魅惑的なイスラム文化の広がる中東へ。さらに地中海へと船は進んだ。

イタリア、ギリシャと巡った後に訪れたのがクロアチアのドブロブニクだ。「アドリア海の真珠」と呼ばれるその旧市街はヨーロッパでも随一の美しさを誇り、世界遺産に登録されている。また、宮崎駿監督の映画「紅の豚」や「魔女の宅急便」のモデルとなった街としても知られている。

船内ではユーゴスラビア紛争に関する講座の通訊を担当していたこともあり、この街が90年代初頭に紛争の舞台になったことを学んだ。ボスニア・ヘルツェゴビナ出身の講演者は、ロマンチックな「恋の街」が戦火に巻き込まれたことが信じられなかったと語っていた。クロアチアもボスニア・ヘルツェゴビナもかつては一国、ユーゴス

ラビアの共和国だった。

ドブロブニクでは、昼間はツアー、夕方から自由行動となった。最初に向かったのはやはり旧市街。港からツアーバスで向かうとすぐに城壁に囲まれたオレンジ色の屋根で統一された旧市街が見えてきた。城壁を抜けると石畳の通路が広がり中世の趣きに溢れていた。狭い路地裏にも商店が並び、ロープで干された洗濯物も何とも絵になる。そこでは街のあちこちでミュージシャンたちの演奏を聞くことができた。

旧市街を後にし、ワインで有名なコナブレ地方を尋ねた。車窓から旧市街全体を一望することができたが、オレンジ屋根の街並みと蒼い海のコントラストがとにかく美しい。

ワイナリーではワインについての説明を通訊するのに苦労したが、日本が大好きだというオーナーが5種類ものワインを試飲用に振る舞ってくれた。これに応えるように参加者も非常に多数のワインを購入していた。これほどたくさんワインを買ってくれたグループは過去にいない、とオーナーが話していたのが印象的だった。

昼食は民家を改造したレストランにて地元の家庭料理を堪能した。ここで

もワインが飲み放題で、地元のバンドによる陽気な演奏があったこともあり、次第に踊りだすツアーの参加者たち。非常に楽しい旅となった。



ドブロブニク旧市街。写真提供：梶浦崇志

夕方になると街に灯りがとまり、旧市街地は一段と雰囲気が増した。ロックの流れるバーやレストランでリラックスした時間を過ごすことができた。その後も船旅は続き様々な場所を訪れたが、ドブロブニクは強く印象に残った場所の一つとなった。是非また訪れたい。

お詫び：8月号「私と国際交流」冒頭で「出講要請」を「出講養成」と誤記しました。お詫びして訂正いたします。

平成26年9月17日発行
一般社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ502
発行責任者：及川 伊佐子
編集：事務局 03(3582)3021
印刷：音和堂印刷

the COMMUNICATOR

心と心、世界と日本を結ぶ*コミュニケーター

月号

私と国際交流・インタビュー

エネルギー維新を目指して

東京大学大学院 教授 工学博士 ^{まつはし}松橋 ^{りゅうじ}隆治

大学院生だった1988年、オーストリアで3ヵ月間、IIASAという、国際応用システム分析研究所の若手研究者研修に参加しました。同研究所は72年に東西冷戦下ながら地球規模の諸問題を解決するために、ソ連、アメリカ、イギリス、ドイツ、日本など東西12ヵ国が政治的な立場を離れて設立し、現在は加盟国も20ヵ国です。ウィーンの郊外、ラクセンブルク村にあり、オーストリア女大公・ハンガリー女王、マリア・テレジアの別荘で、長い廊下に机を並べ、世界中から集う約50名が二酸化炭素(CO₂)の削減などについて議論を交わしました。

●環境とエネルギー問題

週末には職員たちとソフトボールも楽しみましたが、アメリカ人やカナダ人はうまく、ロシア人は苦手。ドイツ人はサッカーは得意ながらバットは初めてで、素振りを教えると、“Now I've got a principle. (原理が分かった)”と仲間入り。ベルリンの壁が崩れる前で、“I have some hope.”と東西融合を予感していたようです。それぞれの国情を背負いながらも同じ目的で地球の未来を皆で見据えていました。

環境問題を意識したのは小学生のころでした。北海道大学土木工学科を出た父が、道路作りの夢を求め大阪に移り、私は幼稚園から高校まで堺市で過ごしました。小学校の低学年のとき、校庭に黄色い旗、赤い旗が立つと校庭に出ることができなくなりました。光化学スモッグが問題になっており、この空気を何とかしたいと子供心に思いました。その後、大学受験のころは、核融合が当時の夢のエネルギー技術で、そういうこともやってみたい、と東京大学を受験しこの道に入りました。

大学では授業のほか、地球環境を考える会や三菱総研、国立環境研究所等も訪ね研究テーマを探りました。妻と出会ったのはそうした研究会でした。修士論文でエネルギー技術の研究を終え、より焦点を地球環境に絞ることにし、温暖化問題の対応策を研究されている茅陽一先生に師事しました。

先のウィーンでの研修から帰国したときに茅先生から、「君のいない間に世界の動きが大きく変わった」と言われたのを覚えています。その年のサミットでの地球温暖化防止に関する宣言を受け、日本政府はIPCCという気候変動の政府間会合に積極的に参加し始めたのです。



1963年、北海道生まれ。85年、東京大学工学部電気工学科卒業。90年、同大学院電気工学専攻博士課程修了。工学部資源開発工学科助手、大学院新領域創成科学研究科准教授を経て、99年、同教授。2011年、工学系研究科電気系工学専攻教授、現在に至る。10年～18年3月、独立行政法人科学技術振興機構・低炭素社会戦略センター研究統括。書著、論文多数。1男の父。

●各国の留学生と議論

研究室には外国からの留学生が多く、インド人のクリシュさんもその一人。マハトマ・ガンジーのひ孫で、インドに戻り日本企業の現地支社副社長を務めており、今でも来日すると連絡があります。おっとりしているタイのプラモットさん、中国の呂さんと王さん、台湾の何さん、韓国の金さん、皆それぞれの国情を背負っており、研究を離れるとそこは世界の縮図で、私はもっぱら議論の仲立ちでした。

論文発表の前日など、準備が夜中までかかり、明け方まで開いている上野の中華店に皆でよく行き話をしました。日本語のうまい留学生もいましたが、会話は英語でした。今、思えば、小学校高学年のときに近くの英会話教室に通っていたからか、英語は話す環境で

あれば、話し出すと話せます。逆に話さないとすぐに話せなくなります。

今、私の研究室にも留学生が多く、ゼミは英語で行っています。とは言え、挨拶は日本語にしています。電気系工学専攻の伝統で、必ず先生に起立、礼をして授業に入ります。当初は学生に強いるようで嫌でしたが、あるとき、仏教の本を読んでいたら、挨拶の「挨拶」は相手に近づくこと、「拶」は相手から引き出すという意だと分かりました。かつてインドで生まれた達磨大師が中国に禅宗をもたらし、それを道元と栄西が日本に伝えました。山の中で修行をしているときに、師と会って真理を取得するには、短い挨拶の中で教えを引き出すことが重要でした。学生からも相互に学びを引き出す、ということ、留学生も一緒に挨拶をしています。

●地方発のエネルギーを

電気工学の博士論文を終えた後は、エネルギー・資源・環境をテーマにし、最近では特に再生可能エネルギー・システムの研究を続けています。太陽光や他のエネルギーを電力システムに取り込むにはどうしたらよいか。実生活に根差した研究です。日本で太陽光発電等が可能となるのは地方が多く、地方自治体との連携が必要です。例えば佐賀県とは、水素エネルギー導入に関する検討をしています。また関東・秩父では市が電力会社を作りました。北海道の町もしくり、地方から新しいエネルギー・システムが誕生しています。

福岡県みやま市は人口4万人、そこで生まれた地域の電力会社が脚光を浴びており、小さなところから大きな動きが起きつつあります。九州と言うと明治維新の薩摩、肥前などを思い浮かべます。大隈重信、福沢諭吉なども九州出身。「西郷どん」ではありませんが、明治維新の立役者たちは学問の基礎にも関わっています。そこには新しいことを起こす「維新の力・胆力」を感じます。海外では、ドイツ他、再生エネルギーのモデルができていますが、今後、エネルギー維新が日本から起こり、世界に広がると思っています。



外務省・新日系人招へい事業

～米国高校生「現在の私」～

IFA は平成 21 年から外務省「新日系人招へい事業」を実施運営しており、今年で 10 回目、計 53 名の米国日系高校生が参加している。ここに、過去の参加者より届いた便りを紹介する。

◇

グレース・アレクサンドラ・ニューセズ
(イリノイ州 平成 22 年参加)

私は現在、イリノイ州の中学校で科学と社会の先生をしています。その後、日本を訪れるチャンスはまだありませんが、また行きたいと思っています。日本のコミュニティとの関わりを持ち続けたいと考えており、当地で行われている、年に 1 度の銀座フェスティバル、夏祭り、盆踊りに参加しています。

中学校の生徒達にはすべての文化を尊重するように教えており、特に日本と米国との友好関係を、自分の経験を基に伝えています。生徒達はいつも沢山の質問をして、興味深々です。

2010 年にこのプログラムに参加できたことは、私にとって一生に一度の特別な経験でした。日本の文化と人々について多くを学ぶことができ、今でも日本で経験をしたことを日々実践しています。日本語も機会を見つけてなるべく使うようにしています。

今年、中学校で日本クラブを立ち上げました。生徒からの人気は上々で、彼らは日本の文化や言語を学ぶことを楽しんでいます。私がそうであるように、生徒達が日本文化に対して熱心になっていることは大変素晴らしいことだと思います。

◇

エミリー・アヤ・イサカリ
(カリフォルニア州 平成 23 年参加)

私は現在、日本に住み、東京で人材採用の仕事をしています。米国の大学在籍中の 2018 年、日本に約半年間留学しその後、大学を卒業してすぐ日本へ来ました。在籍中には、日米関係に詳しい 2 人の米国政治家の下でインターンをし、米国国会議事堂での日米関係のブリーフィングに参加しました。

また、マンズフィールド財団の東京事務所でのインターンでは日米関係について学び、日本の国会議員にも面会しました。日本留学中に、日本に住み、ここで仕事をしたいと確信したので、日本で就職活動をしました。

6 年前にこのプログラムに参加できたことは一生に一度の経験で、貴重な

体験ができたことに感謝しています。今でも参加メンバーやホストファミリーとは連絡を取り合っています。当時のホストファミリーは、現在、私の日本の家族とも言える存在で、私の日本の生活を助けてくれています。

◇

エリザベス・ダウンス・クラタ
(コロラド州 平成 24 年参加)

私は現在、日系アメリカ人市民同盟でのフェローシップを終え、Global Zero という核兵器廃絶を目指す組織での仕事を始めたところです。

2016 年に大学を卒業してからは、JET プログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）で長崎県大村市で 1 年間過ごしました。そして 2017 年 12 月には、日系アメリカ人市民同盟と日本の外務省が連携した、カケハシ・プロジェクトで引率者として、200 人もの日系アメリカ人青年たちを日本に連れて行きました。JET で日本で過ごした日々、そして日系アメリカ人市民同盟で外務省や関連団体等、日本政府と日々やり取りをした経験は、私にとって日米の相互理解と両国の友好関係を築くとても良い機会だったと思います。そしてその経験を日系人として日々学生たちに教えています。

この新日系人プログラムに参加できたことは、私の人生を大きく変えてくれました。これからも私の経験を広く伝えていきたいです。（和訳：編集）

世界万華鏡

ロシア、初めて出張記

株式会社ロゴ ソリューション・マネジャー

とみなが ひろし
富永 宏志

10 月 4 日、まだまだ残暑が続く日本を後にロシアを訪れる機会を得ました。ロシア西部に位置する、人口 30～50 万人のアルハンゲリスク、オレンブルク、キーロフ、カルーガの 4 都市です。それぞれ 2 日間、「KAIZEN 講座」を実施しました。

最初の訪問地、アルハンゲリスク州は、3℃と日本の真冬並み。しかし現地の方はまだ薄着も多く、流石ロシアの方は寒さに強いと感動です。しかし、それ以上に驚いたのは、参加者の期待です。当初、会場は 40 人規模とのことでしたが、最初の会場は 100 人以上の参加者となり、大学の階段教室です。他 3 会場も同様に各 80 人以上の参加となり大盛況でした。

会場を提供くださった各国立大学の学長や州の代表、州政府の方々、大統領プログラム（1997 年開始のロシア大統領令、「企業経営者養成計画」）修了者との交流を通し、講座への期待がひしひしと伝わりました。皆さん、よく食べ、よく飲み、明るく、自分の意見をもつ素晴らしい方々ばかりでした。申込者が多数だったため、参加条件を絞り、経営者、大学講師、工場長、州の官僚などが多かったです。

参加者は、誰一人として居眠りをする方はおらず、本当に真面目で何でも



吸収しようと集中して聞いています。気になることがあればすぐに質問が飛び、真剣勝負です。

講座は「安全」と「見える化」についてのワークショップです。これまでの支援で「KAIZEN」がロシア企業・公官庁でも取り入れられていますが、定着が難しいのはなぜかを考えました。終了後の現地企業訪問や見学でわかったのですが、経営者幹部は KAIZEN を勉強し、生産性の向上を目指し、整理・整頓・清掃も取り入れているのですが、「全員参加のチームプレイ」の考えが残念ながら従業員に浸透していないと感じました。

このため、まずは「現場の納得感を得るものから開始する」が検討課題。最後の講座では、特に従業員にとって大切な「安全」で幸せな職場を意識し、「自分達の職場環境を整備することには、お金を掛けなくてもできる」を伝えたと変化が出てきたようです。

今後の皆さんの KAIZEN 活動に活用し継続してもらいたい旨を伝え講座

を終了しました。受講終了後に多数の方々を手書きパネルを写真やメモを取る姿があり手応えを感じました。

会場の外は、木々が黄（ゆ）色に色づく紅東（さつまいも）の時期とも重なり、その美しさに感動でした。



日本の製造業やサービス業の現場では従来から「カイゼン活動」が活発に行われています。仕事の品質を高め、仕事をやり易くすることは、上司の指示によることもありますが、多くは職場のチームごとに自主的になされます。ロシアの企業経営者たちが、働く人たちとのコミュニケーションを活発化し、成果が上がることを期待しながら帰路に着きました。

平成 30 年 12 月 17 日発行
一般社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台 3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ 703
発行責任者：及川 伊佐子
編集：事務局 03(3582)3021
印刷：音和堂印刷株式会社

the COMMUNICATOR 3

心と心、世界と日本を結ぶ*コミュニケーター

月号

私と国際交流・インタビュー

チェスで広がる世界

たかはし たかよし
社団法人国際フレンドシップ協会 事業部次長 高橋 孝毅

中学生のときに偶然目にした英語の雑誌、リーダーズダイジェストを親に頼んで購読し始めたのが私と海外との付き合いの始まりでした。当時、英語の内容をすべて理解する力は当然ありませんでしたが、見出しや絵を中心に一通り頁をめくり、自分の知らない世界に思いをはせていました。その記事の中に「ギタリストになるにはスペインの音楽学院で」というのがあったのです。その頃、町の楽器店のショーウィンドウに飾られていたギターがどうしても欲しくて、何とか買ってもらうと、もう私の心はスペインへ飛んでいました。その思いを実現するべくまずはスペイン語を勉強し、その後、念願のスペイン行きを果たします。

●ギタリストを断念

ある程度言葉を勉強しましたので、大きな不安もなくスペインに渡ったのですが、到着したその日に大きな出来事がありました。予め手続きをして与えられた学校の寮が女性専用だったのです。申込書には確かに男女の欄もあり間違えなく記入しました。スペイン語では「o」で終わる名前は基本的に男性（ちなみに、「a」で終わる名前は女性）なので、「i」で終わる私の名前を男性ではないと女性寮にしたのだと知りました。結局、違う宿舎を紹介してもらい落ち着くことができましたが、今、思えばよく交渉したものです。そのときに、何でも自らが動いて主張していかなければならないということをも身をもって学びました。

大学に入学すると同時に、ギターの個人教授にも通い始めました。プロの先生との一對一のレッスンは緊張感もありましたが、心から嬉しい時間でした。何と言ってもその音色が好きでした。しかし、練習をすればするほど、プロへの敷居の高さを知りました。そして1年が経ち分ったことは、才能ももちろんですが、プロのギタリストを目指すなら、もっと小さな頃から始めなければならないということでした。大きな挫折です。とはいえ、スペイン

に1年もいると考え方が楽天的になります。まずはここでの生活を充実させて大学を出てから次を考えようと思いました。



1957年、岩手県生まれ。スペイン国立マドリード大学言語学部を卒業後、在ラス・バルマス日本総領事館に3年半勤務。約10年のスペイン滞在後帰国し、スペイン語講師を経て、外務省の外郭団体にて国際研修業務、海外派遣・招聘業務に携わる。現在、社団法人国際フレンドシップ協会事業部次長。チェスの世界ランキング(FIDE)をもち、79年にスペインのチェス・チャンピオンを破り、日本のチェスプレーヤーとしてスペイン新聞紙上を騒がせた。

●大学での学生生活

大学での生活で何よりも収穫は、ヨーロッパ各地、そしてアメリカからの留学生が来ていて、スイス、オランダ、イギリス、ドイツ他、それぞれに文化や言語の違う友だちができたことでした。言語学科ではスペイン語や言語学を学び、スペイン絵画のクラスでは、近くにあるプラド美術館へ通い、展示された絵の評論もできるようになりました。こうして大学の授業とギターのレッスンの日々、そして実は友だちを一番増やすことができたのはチェスだったのです。

日本でスペイン語を習っていたときに、将棋が趣味と話すときスペイン人の先生に「日本では将棋だろうが、スペインではチェスができるといい」と言われ、その先生とチェスに親しんでいました。あとで知ったのですが、その

方はスペインの教会で有名な神父でした。日本の碁・将棋会所のようにヨーロッパには数多くのチェスクラブがあり教会で運営していることもあります。大学3年生の頃には複数のチェスクラブに所属して試合にのめり込んでいました。その成果があつてか、在学中にマドリード・チャンピオンにもなることができました。学校の休みにはスイスやドイツの友だちを訪問し、気軽に公園でチェスを楽しんだり、教会の前で高さ1メートルもあるコマを動かして試合をしたりと、言葉は通じなくてもチェスという共通言語で市民の中に躊躇もなく入って行けました。

●チェスは紳士淑女のスポーツ

仕事に忙しく、今では国内外の公式戦に出る機会はありませんが、1990年のチェス・オリンピックに日本代表チームの一員として出場したときには、当時のスペイン・チャンピオンやヨーロッパのチェス仲間にも出会え、チェスを通じての人の繋がりを改めて実感できました。ここ数年はコンピュータのネットチェスで世界中の友人とチェスや会話を楽しんでいます。欧米には多くのチェスサイトがあり、そのチェス人口に驚かされます。国をあげて取り組み、企業や地元の支援が得られる欧米のチェス界ですが、日本ではそれは期待できません。それでも日本チェス協会には300人を超える有段者がいて、中、高校生の優秀なプレーヤーも出ています。

私のスペインの友人は日本のチェスサイトが好きで、全く日本語が話せないにもかかわらず、楽しく試合をしています。日本の人は礼儀正しくて気持ちがいいと言います。日本語が分からず黙ってチェスをしていた友人に「挨拶をした方がいいよ」と片言の英語で話し掛けて、日本語を教えてくれたのは北海道の中学生だったそうです。趣味一つあれば言葉を越えて、世界中に友だちを作り交流することができるのです。礼儀正しい日本人が世界中に羽ばたいて欲しいと思います。

the COMMUNICATOR 8

心と心、世界と日本を結ぶ*コミュニケーター

月号

私と国際交流・インタビュー

海外の感動を身近なものに

株式会 社 王カンパニー 代表取締役 おうの ゆりこ 王野百合子

「買い物中心の海外パック旅行では何だか物足りない」、そういう方は多いのではないのでしょうか。海外に出かけたらオペラやスポーツなども気軽に楽しんできて欲しい、そう思ったのは20年前。夫の後押しもあり会社を設立、時代の流れか、年々、海外の芸術に興味をもたれる方々が増えてきており、これからは海外の優良なチケットを手配し旅行者の皆さんに提供していきたいと思っています。

●普通の幼少時代でした

国際交流ということを変えて考えることは今までにありませんでした。子どもの頃は普通の日本の小、中、高校生と同じで、回りに外国の方などいない環境で育ち、それでも外国への憧れはもっていました。ピアノは幼稚園の時から習い、将来はミュージシャンになりたいと思っていた頃もあります。そして当時も人気だったスチュワーデスに応募、夢がかなって国際線に勤務できることになった時は、本当に嬉しかったです。今、思うとそれが現在の私の仕事にも繋がっています。国際線の仕事をしていた時に、アメリカやヨーロッパ、オセアニアに行く際は、短い休憩時間を使って大好きな音楽に触れたいと思ったのですが、これがかなり敷居が高い。現地の劇場は会員制のためオペラの券もなかなか購入できないのです。それでも何とかして購入ルートを見つけ、寸暇を楽しむ日々でした。

スチュワーデス3年目の1981年に、偶然にテレビ局の仕事の紹介を受けた時は、全く違う世界で果たして自分に務まるのかと、とても悩みました。楽天的な私は、それでも何とかかなると思ってお受けしたのです。フジテレビ「なるほど!ザ・ワールド」の現地レポーターでした。現役のスチュワーデスによるレポートという設定で、アメリカ・テキサス州とオランダに出かけ、私の好きな芸術に関する内容の仕事でした。2回だけで、その後はプロのレポーターに替わりましたので、ほんの少しの経験でしたが、これが私をさらに今の仕

事に近づけることになったのです。放送時間は20分程度でしたが、10名近くのスタッフが何時間もかけて海外での感動をプロデュースするのです。より多くの方々に夢を届ける仕事があるということを目の当たりにしました。



1959年東京生まれ。日本航空株式会社入社。スチュワーデスとして活躍。1981年、フジテレビ「なるほど!ザ・ワールド」のレポーターに抜擢され世界を広げる。その後、「芸術と触れる旅」を提供する仕事を思いつき、会社を設立。夫と小学生の一人息子の世話も完璧にこなし、自らも輝いている。

●自ら感動したい

海外ロケの仕事を終えた時、これからの人生、自分にできることで回りの皆さんに喜んでいただけるようなことをしたいと思いました。そしてそれはオペラでした。この素晴らしい海外の芸術をもっと日本人の身近なものにしたい、それなら私の経験が役に立つと思いました。とはいえ趣味を仕事にするのは大変で、何度もうやめようと思ったことか知りません。それでも年に何度か自分の足で海外の劇場を回ると、自然と意欲が湧いてきました。

先日は、ウイーンに小沢征爾さんのコンサートを観に行きました。感動という言葉以外に表現できません。休憩

の時間にふと気づくとロビーで寛ぐ観客の皆さんと興奮しながらお話をしていました。ヨーロッパや最近ではトルコなど中東の皆さんも多くお見かけします。「日本からですね」と声をかけられ、色々尋ねられもします。そんな時、幼い頃には思いもよらなかった海外の方たちと自然に話している自分がいるのです。こんな雰囲気をも多くの日本の皆さんに味わってもらいたいです。

海外に行かれる方には、どんなものにも興味をもたれているのかなどをお聞きして、それに合ったものを紹介します。なかなか取れない券もあり、思うようにいかない場合もありますが、ほとんどの皆さんは現地に行けばその雰囲気に解けこみ楽しんでくださいます。

●日本人の感性が好き

最近では、定年を迎えられたご夫妻がゆっくりと海外でオペラやスポーツを観戦したいと多くお問い合わせをいただきます。私どもより知識をお持ちの方もおり、日本人の芸術に対する教養の高さも実感しています。

悲しいこともありました。難病をかかえる二十歳の青年から、どうしても行きたいのに券が取れませんと電話がありました。ロックコンサートです。確かに難しかったのですが、手を尽くして券を手に入れた時はほっとしました。早速電話を入れると、電話口で歓声をあげてくれました。しかし結局、そのチケットを取りに来ることはありませんでした。ご家族からの連絡でお亡くなりになったと知り、もう少し早く出会っていただくと虚しい思いでした。そのチケットは青年とともに棺に入りました。

世界のどこかで起こるテロや災害は、海外への足を遠のけます。昨年では新潟震災の翌日からパタッと電話が止まりました。同じ日本人が苦しんでいるのに自分たちだけ楽しんで来られないという気持ちなのです。そうした日本人の感覚を私は好きです。戦争や災害がなくなり、各国の芸術を身近に楽しめる世界になって欲しいです。



パシフィックベンチャー

1995-2004、10年の軌跡

1995年、戦後50周年を機にアジア近隣諸国他、関係国の青少年が同世代の交流を通して相互理解を深め、ともに未来への新たな関係を構築することを目的に、日本政府は『平和友好交流計画』を開始した。その中に、戦争捕虜の孫を中心とする英国各地の青少年を招聘する、“Pacific Venture”事業があり、今般、英国より10周年記念冊子が事業を担当した当協会スタッフに送られてきたので、その一部をここにご紹介する。



「ホストファミリーに会う直前に広島平和記念資料館に行きました。一中略—この旅行の目的、つまり人を許し友好を深めるさきがけになるということ学ぶのにふさわしい場所でした。私の祖父は同じ考えを持ち、私にもそう信じるように教えてきました。2日



英国高校生とジュニア大使（長野県・穂高町にて合宿。交流会、1996年）

間という短い滞在期間でしたが、ホストファミリーと別れる時にはお互いに泣き合いました。この貴重な経験は一生忘れることができないと思います。
Mia Spreadbury, December 1998

「パシフィックベンチャーの旅は2週間で帰国してもまだ終わりませんでした。この旅がきっかけとなって、私は再び日本の僻地に戻り、毎晩布団で眠り、地域でただひとりのガイジン、英語教師のタラ先生として注目を浴びるようになったのです。—中略—パシフィックベンチャーは、私と私の家族に、許すことと学ぶこと、そして最も大切なことですが、日本という個性的ですばらしい国、文化、人を受けとめることを教えてくれました。
Tara Duignan, December 1999

「祖父は英国の北東部でとても質素に暮らしてきたごく普通の人で、68歳になるまでコーンフレークさえ食べ

たことがなかったくらいです。しかし、祖父とその仲間たちは素晴らしいことを成し遂げるために旅立ち、それが私の未来につながりました。2000年4月にパシフィックベンチャーに参加したことは、私にとって、とても大きな出来事でした。伝統的なものから超現代的なものまで、日本の様々な側面を見ることができました。—中略—日英両国が手を携えてよりよい未来を築いてゆかねばならないとの思いを胸に帰国しました。

Nicola Veitch, August 2000

「ホームステイ先の息子さんのケイイチさんとはいまだに連絡を取り合っています。彼はちょうど今、私と両親が住むウイルトシャーに来ているところ。かつては敵対した国同士も和解することができるのです。これこそがパシフィックベンチャーの理想が実現した証だと思います。

Stephen Sowerby, April 2001

世界万華鏡

あいさつ シリーズ②

日本語教育 ^{ながほすみお} 永保澄雄

スカルノ時代の終わりの2年間、私は西部ジャワのバンドンで日本語を教えていた。この地には以前ブリヤンガンという王国があり、バンドンはその首都であった。それで今も古都バンドンと呼ばれている。ここに住んでいるのはスダ人であるが、沢山あるインドネシアの種族の中でも特に温和なことで知られている。大声で争うことなどはなく、もしあったとしたら多分それはスマトラ人だろうと言うくらいである。話されるスダ語もこの国の共通語であるインドネシア語よりは遙かに響きがやさしい。

我々日本人が一般にインドネシアに感じる印象よりは、風土も、人も、言葉もずっと深い文化を現していた。そしてあいさつの仕方も誠に風雅なものであった。まずそのあいさつの仕方であるが、向き合った二人は小腰をかかめ、両手を合わせたまま相手の方に差し延べて指先でお互いの指先をはさみ、それをもとに戻しながら体を起こすのである。私が本格的なそのお辞儀を目の当たりにしたのは、招待された地元名士の会であった。あちこちでこのあいさつが交わされていた。その中で際立って美しいお辞儀をしている二人の

老婦人がいた。いずれもジャワ更紗のサロンの上にうすいレースのカバヤをまとい、右肩に掛けたスレンダンを左の脇で結んだスダの女人の正装である。その姿での二人のあいさつは小腰をかかめたとこると言い、その体をゆるやかに元に戻すところとこると言い、まるで絵が動いているようだった。スダの人たちは今もこうしたあいさつをしていたのだった。

日本にはもうこういうお辞儀はないのかと思っていいたら、京都に住んでから、こういうことがあった。その頃勤めていた大学の教授会の懇親会が八坂神社の傍のさる料亭で開かれた。会が始まってすぐ、そこのお内儀があいさつに現れた。着物姿が板についた貫禄のある人だった。ほど良い場所にピシリと座り一礼した。有無を言わせぬものがあつた。私もあわてて座り直した。あぐらをかいたまま聞いている人、飲むにかまけて聞いている人もいて恥ずかしく思った。口上のあとのお辞儀も見事だった。そのあとはお内儀が徳利をもって注ぎに来た。まっすぐ私の前に来たのできつとこちらが座り直したのを見ていたのであろう。私はまた正座し、うやうやしくお内儀のお酌を

受けた。

さて、タイの日常のあいさつが合掌であることは知られている。私が初めてタイに行った時、チェンマイの路上で行商の女の子から蜜柑のような果物を買ったことがある。代金を渡すと合掌された。姿の良い合掌であった。

日本でもお坊さん同志のあいさつは合掌である。私は寺育ちなのでこれは生活の中にあつた。檀家総代が「うちの方丈はお布施をもらう時も立派な合掌をする」と言っていたが、これはもちろん半分は皮肉である。ともかく、曹洞宗のお坊さんはキチンとした合掌をする。これは見ている感じの良いものである。威儀即佛法（いきそくぶっぽう）が宗旨であるのでこれは当然のことであるが、それほど深く思い至らなくても、あいさつというものはもともとこういうふうにするべきものであろう。心が形に表れてこそあいさつなのである。

平成17年7月17日発行
社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ502
発行責任者：及川 伊佐子
編集 集：事業部 03(3582)3021
印刷 刷：音和堂印刷